

# 教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会

発行者 渡 邊 宏

編集 広 報 部

## — も く じ —

◎会長あいさつ	1	◎全国研究大会徳島大会報告	4・5
◎県教頭会・全国の動き		◎特色ある学校	6
定期総会・講演会	2	◎地区だより	7
全国要請推進部長会・全国専門部	3	◎ひろば・編集後記	8

## 未来を託す若者たちに

### 会長あいさつ

宇都宮市立戸祭小学校 渡 邊 宏



今夏、遙か地球の裏側、リオデジャネイロから送られてくる活躍する選手たちの勇姿に多くの方が感動されたことと思います。中でも、体操や水泳で世界と肩を並べる若者たちの自信に満ち溢れた“どや顔”に気持ちが高揚したのは私だけではないのでは。「ゆとり世代」(2016年現在で20歳～29歳位の年齢層)と言われ、ややもすると「自分の夢を描けない」「指示待ちで自己決定ができない」「現実逃避で自己肯定感が持ちにくい」などと揶揄されてきた世代ですが、スポーツ界だけでなく音楽やバレエなどの芸術の世界、科学や経済の分野でも活躍する「ゆとり世代」の若者たちをみるにつけ、教育界はどうだろうかと思いを巡らせる日々です。

教育現場の世代交代と言われ久しくなりますが、団塊の世代の大量退職に伴い、新規教員の採用数がここ数年一気に増えています。私の職場でも毎年2名の新規採用教員が配属され続けていますが、このペースで世代交代が続けば、昨今の多様で複雑化した教育課題を抱える現場は、今までのような学校運営が成り立たなくなるのではといった懸念が、研修会や教育雑誌等で耳目にします。

30余年前、私たちが教職の道を歩み出したのも、今日のような大量採用の時代でした。私の新任校は県北の山深い小中併設の僻地校で、小中合わせて20名足らずの教職員の中、私も含めて4名の教員が採用されました。あの当時の管理職の方々もきっと今と同じような悩みを抱えていたのかもしれませんが、ただ、幸いなことに、少ない職員構成にもかかわらず、30、40代の中堅・ベテラン教員がいて、右も左もわからない私たちにいろいろ指導してくださいました。また、自分たちも先輩の背中を見て、こっそり授業を盗み見て、真似ることから一步一步、授業の技、児童・生徒指導のコツ、上司との関わり方を学んでいきました。

時代は変わりましたが、人材育成は不易の課題です。また、我々教頭にとっては重要な職務の一つです。本会においても、このテーマで幾度となく研修や実践報告がされてきました。また、様々な新採育成の施策が講じられ、資質能力の向上に取り組まれています。十分とは言えない状況ではないでしょうか。学校の要である教頭にとって、組織運営、危機管理、地域連携など学校経営にとって重要な課題は多々ありますが、それらの根幹にあるのは優秀な教職員集団であると思います。だからこそ、若者を含めた人材育成は最優先の課題であると思います。

4年後の東京オリンピック2020年には県内小中学校の教員の約16%は退職し、益々若い世代の割合が高くなります。未来を託す若い先生方、今後の教育界を背負う若い先生方が自信と誇りを持って、子どもたちと向き合えるよう育成していくことが、我々教頭に課せられた使命と考えます。人の育て方は多種多様であるし、それぞれの学校には、これまで取り組まれてきた人材育成の素晴らしい実践や方策があるのではないのでしょうか。それらのノウハウを互いに共有できる教頭会であり続けてほしいと願っています。

この夏、若者たちが見せてくれた All Japan の精神で、今後も一丸となって邁進していくチーム栃木、チーム教頭会でありたいとオリンピックを観て気持ちを新たにしました。

## —— 県教頭会の動き ——

### 定期総会

#### 第54回県教頭会総会 — 係を通して —

講師対応係 宇都宮市立田原西小学校 高橋 司

「第54回栃木県公立小中学校教頭会定期総会並びに研修会」では、「特別の教科 道徳を要とするこれからの道徳教育の展開」を演題に、昭和女子大学 押谷由夫先生に講演をお願いしました。

午後1時5分に宇都宮駅に到着予定を受け、教育会館からバスで12時30分に宇都宮駅へ行き、先生をお迎えした後、タクシーにて教育会館入り。

押谷先生はとても気さくな方で、会場へ向かう車中でもお話を聞くことができました。『日本の道徳は世界から注目されていること』や『東南アジアの日本に習った道徳教育事情』等々、興味深いお話をお聞きすることができ、会場までの時間を楽しく過ごさせていただきました。

### 講演会

#### 「特別の教科 道徳」を要とするこれからの道徳教育の展開

— 「特別の教科 道徳」の理念、方法、評価を踏まえて —

昭和女子大学大学院 教授 押谷 由夫 氏

宇都宮市立晃宝小学校 小川 順子



道徳教育の新たな方向性と「特別の教科 道徳」の内容・方法について、長年、道徳教育の推進・指導に携わり、最前線で活躍されている押谷教授に講演をいただいた。講演は「現在は主体的な学びが求められている。教師が一生懸命になる授業から、児童生徒が自ら学び意欲を高める学習へと変えていく必要がある。子どもたちは成長し、社会に出て生きていく存在である。子どもの未来を考え一人一人に丁寧にかかわってほしい。教員の中には、「特別の教科 道徳」に対して不安や負担感を

感じている者もいるようだが、教員自身が「特別の教科 道徳」について理解し、意欲的に取り組んでもらいたい」という話で始まった。学校全体で道徳教育を推進していくうえで確認しておきたい内容であり、各学校の教育活動においてぜひ生かしていただきたい。次に、講演内容の一部を紹介する。

- 道徳教育は、自らをかけたがえのない人間として自覚し、よりよい生き方を自分らしく追い求めていけるように援助していくことである。
- 道徳の時間と「特別の教科 道徳」は、道徳の本質に基づいて設置されていることでは同じである。ただし「特別の教科 道徳」として位置づけられていることから、各教科で行われているような丁寧な指導、積み重ねる指導が必要となる。また、道徳教育推進教師を中核とする組織的、総合的な指導、環境整備、家庭や地域との連携など、特別の教科という特質を生かした取組も重要となる。
- 「特別の教科 道徳」の学習指導要領を読み解き、指導方法を工夫する。

〈道徳教育の目的・目標を再確認する〉

学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育であり「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の根幹となるものである。

〈「考え、議論する」道徳教育への質的転換を図る〉

「これからの時代に求められる資質・能力」や「アクティブ・ラーニング」の視点から学習・指導方法の改善を図る。問題解決型の学習や体験的な学習などを通じて、自分ならどのように行動・実践するかを考えさせ、自分とは異なる意見と向き合い議論する中で、道徳的価値について多面的・多角的に学び、実践へと結びつけ、更に習慣化していく指導へと転換していく。

## — 全国の動き —

### 全国要請推進部長会

#### 要請部活動について

県教頭会要請部長 宇都宮市立錦小学校 久保井 規 文



県教育委員会への要望活動

要請部は、教育環境の整備及び学校や教頭が抱える諸課題の改善を目指して、栃木県学校管理職員協議会と連携・協力しながら、県教育委員会や県議会並びに文部科学省等の関係諸機関に要望活動を展開しています。

今年度は小中学校全学年での35人以下学級の継続・拡大、再任用施策の検討、免許外教科担任の早期解消、完成度の高い教職員評価システムの策定、副校長・教頭の枠外配置、教員給与の優遇措置等について要請を行っているところです。

7月には、全国公立学校教頭会主催の全国要請推進部長会が東京で開催されました。これは国の来年度予算の概算要求を見据えて、国会議事堂近くにある議員会館を訪問し、国会議員に対して要望を行うものです。今回は参議院議員選挙直後という時期でもあり、国会議員の方々との面会は叶いませんでしたが、「要望書の内容は必ず議員に伝えます」と各事務所に対応してもらいました。



義家弘介文部科学副大臣を訪問

また文部科学省において、義家弘介文部科学副大臣と直接お会いすることができました。義家副大臣からは「現場で頑張っている先生方の声を真摯に受けとめ、しっかりと施策に反映させていきたい」と力強い言葉をいただきました。

学校を取り巻く問題は複雑化・多様化していますが、それらに対し正面から取り組んでいる教職員の情熱と苦悩を、多くの人々に理解してもらうことは重要だと考えます。今後も、未来を担う子どもたちのために、学校現場の実態を捉えた活動を実施していきます。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。

### 全国専門部

#### 全国公立学校教頭会総務部員活動報告

全公教総務部員 小山市立中小学校 上野 敏 晴

全国公立学校教頭会総務部は、どんな仕事をするのか、総務部員のお話を頂いてから、不安な時間を過ごしました。そして、初めての研修会。総勢5名の部員の皆さんは親切で親しみやすく、初めて会ったとは思えないほど打ち解けることができ、本当に安心しました。

総務部員の大きな仕事は、7月に行われる全国要請推進部長会の運営です。今年は、7月14・15日の1泊2日で行われました。1日目は、講話と全国の代表者（各都道府県の要請部長）を8グループに分けた、グループ別討議会が行われました。2日目は、グループ別討議会の報告と講演があり、その後要請活動を実施しました。要請活動とは、国会議員に、副校長・教頭の社会的地位の向上と学校現場における教育活動の充実に向けた政策提言を行うものです。そして総務部員は、今回の結果を踏まえて次年度の提言内容を作成します。

私はこの活動をとおして、都道府県によって副校長・教頭の置かれている状況の違いや県ごとの教育格差の存在に気づかされました。私が一番驚いたのは、東京都の都市部の学校で、副校長・教頭の未配置校が存在するという事実です。東京では管理職志望者が少なく、成り手が中々決まらないそうです。次に驚いたことは、県により給与等に差があって、教職希望者が待遇のいい他県に流れてしまうことです。新採だけかと思ったら、中堅教員の中にも、退職して他県に移ってしまう人もいます。

東京での会議があり、ちょっと大変な面もありますが、最新の教育政策や他県の教育事情をいち早く知ることができる上、他県の先生方とのネットワークも広がり、とても勉強になっています。よろしかったら、どなたかやってみませんか？

## —— 全国公立学校教頭会研究大会徳島大会報告 ——

### 記念講演

#### 「そうだ、葉っぱを売ろう～居場所と出番づくり～」を聴いて

佐野市立西中学校 岡部 孝雄

大会三日目、株式会社いろどり代表取締役 横石知二 氏を講師に迎え記念講演が開催されました。徳島県の山間部に生活するご高齢のお爺ちゃん、お婆ちゃんたちが、「いろどり」という会社を支える社員として、活き活きと生活している様子が紹介されました。徳島の山の中から届けられる葉っぱは、日本全国の料亭料理を更に彩り美味しくしているどころか、今や、世界各国の有名シェフのもとへ出荷されていることに驚きました。



当時の徳島県上勝町は、益々過疎化が進み、古い習慣を頼りに暮らしている老人たちから聞こえてくるのは愚痴ばかり。決して豊かとは言い難い生活は、町へ出て生活している者を成功者だと考えていました。ところが、今や葉っぱの販売で年収1,300万円を稼ぐお爺ちゃん、お婆ちゃんが暮らしている集落へと生まれ変わっているのです。横石氏は会社を興すに当たって高齢者たちに、会社の概要や経営方針、販売の仕組み等を分かりやすく根気強く説明し、少しずつビジョンを理解してもらったそうです。会社が

進んでいく方向に透明性を感じると不安はなくなり、意欲が高まり、出荷量も増えました。さらに、必要と思われる情報をより早く伝えたことで、老人たちは知り得た情報と経験を融合させた新しい方法を考え出し主体的に作業を行うようになりました。社員ではありませんが、基本的に在宅契約ですので、情報は自宅ですぐに入れなければなりません。そこで、複雑感を極力省いた、葉っぱ業務に関する操作に特化したパソコンを提供したのです。必要性の部分が満たされた高齢者は、誰よりも葉っぱをよく知っているという年季に裏打ちされた強みを一層発揮してくれたそうです。

紙面の都合で雑ばくな紹介しかできないことを残念に思いますが、子どもたちを思い浮かべながら聴いていると、方向性や目標、ニーズに合った情報提供、更には学習ツールの習得など、あらためて学びに添えるべき大切な「彩り」を確認することができました。

### 分科会に参加して

宇都宮市立瑞穂台小学校 高島 俊幸

7月27日、全国公立学校教頭会研究大会徳島大会の初日は、栃木県公立小・中学校教頭連絡会議と重なり、研究部長・発表者の先生以外は午前の教頭連絡会議の全体会の各講話をしっかりと聴講した後すぐに、チャーターしたバスに乗り宇都宮駅に向かい、新幹線・山手線・モノレールを乗り継ぎ、徳島阿波おどり空港に到着したのは午後6時を過ぎていた。2日目は10の分科会が開催され、終日、熱心な討議が行われた。私が参加した特別分科会Ⅰは、東京大学大学院教育学研究科教授 勝野正章氏による「子どもも教師もアクティブ・ラーニング」というタイムリーな内容であった。アクティブ・ラーニングが始まった経緯説明やアクティブ・ラーニング専用の教室、大学の授業の様子が紹介された。また、次期学習指導要領の改訂の視点においては「問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程」「自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程」「自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程」がそれぞれ実現できているかどうかを問う「指導方法の見直し」が説明された。次に、子どもだけではなく、教師が職場で互いに学び合ったりサポートし合ったりするようなアクティブ・ラーニングの大切さが説明された。午後のグループ討議では、午前の講義を受けて、各学校の実情や悩み等を教職員のアクティブ・ラーニングの視点から討議した。どの学校からも人材育成に力を注いでいる様子が伝わってきた。勝野先生の「先生方がもともと持っている学びたいという気持ちを大切に」「先生方の対話が生まれるようなしかけを作っていく」という言葉が印象的であった。

## 提言を終えて

佐野市立城東中学校 谷 直 人

平成28年7月27日から3日間にわたって徳島県徳島市で開催された全国大会に第1A分科会「教育課程に関する課題」の提言者として参加してまいりました。

全国から3千人が集まる盛大なもので、第1日目は、開会行事とシンポジウムが行われました。シンポジウム終了後に約1時間程度の各分科会での打ち合わせを経て、懇親会に参加させていただきました。おいしい地元のお酒を酌み交わしながらの全国各地から参集した教頭先生方との懇談は、気持ちをとても和ませてくれ、また有意義なものでした。

翌日、分科会本番に臨みました。アスティ徳島というメイン会場の3階の1室に約200人の教頭先生が集まる中、最初の提言を行いました。佐野市教頭会で平成26年度から3年間の継続研究した小中一貫教育とその推進に向けた地域連携教員の活用について、約20分間の提言を行いました。

参加した先生方も興味深く発表を聞いてくださったようです。提言後の各グループの協議では、全国的に推進されている小中一貫教育に関する内容を中心に熱の入った協議の様子を確認いたしました。協議後の講評で、助言者からの「鉛筆削り」に例えた教頭職としての心構えがとても印象的でした。

準備等がなかなか進まず大変な思いも数多くありましたが、終わってみればすべて良い思い出になっています。貴重な経験をさせていただいた県教頭会及び事務局、そして佐野市教頭会の皆様はこの紙面をお借りし感謝申し上げます。そして、徳島ラーメン、大変おいしかったです。「ごちそうさまでした。」

## 大会に参加して

塩谷町立船生小学校 齊 藤 和 久

7月27日(木)、栃木県総合教育センターで開催された栃木県公立小・中学校教頭連絡会議に午前中参加し、その後、全国研究大会への参加者34名が貸切バスで宇都宮駅へ移動し、徳島へ向かった。

栃木県からの参加者は、28日(木)、2日目の分科会からの参加となり、10の分科会に分かれて参加した。

私が参加した特別分科会Ⅱ「地域連携・業務改善」は、徳島県教育会館が会場で、徳島駅前からの路線バスでの移動であったが、前もっていただいていた交通案内ではバス停留所が分かりにくく、地元の方に尋ねての移動となった。平成30年度、本県で開催する「第59回関東甲信越地区公立学校教頭会 栃木大会」に向けて、参考になったことは分かりやすい乗り場案内を作成すること、各会場への宇都宮駅前や宿泊施設からのシャトルバスの運行も検討していくことであった。

特別分科会Ⅱの「地域連携」では、NPO法人グリーンバレー理事長 大南信也 氏の過疎化が進む地域(神山町)においての、様々な先進的な取組、地域づくりについての講演を拝聴した。その後のグループ協議では、地域や地域住民と連携・協働するためには学校や教師としてどのように関わっていくのかについて話し合った。この協議を通して、地域連携についての地域住民や教職員の発案企画等を副校長・教頭として受け止め、これらの実現に向けて前向きに検討し、どのようにして協働で実行に移していくかが重要であることを学んだ。

本県から参加した皆様と移動を含めて3日間行動を共にし、各学校や各地区の教育事情に関する情報交換ができ、全国研究大会に加えて大変有意義な研修となった。



## 「早寝早起き朝ごはん運動」をとおして

那須烏山市立七合小学校 野上 なつみ



七合小学校は、那須烏山市の北部に位置し、近くを那珂川が流れる豊かな自然に恵まれた学校です。本校は、平成23年度からの2年間、栃木県PTA連合会で推進している、子どもの生活リズム向上を目標に掲げた「早寝・早起き・朝ごはん」運動の「研究PTA」の委嘱を受け、食育に視点を当てた実践活動に取り組んできました。平成26年度には、学年懇談会において「正しい生活リズムをつくれる親」をテーマにした「親学習プログラム」の実施や、栄養教諭による食育に関する授業の実践、バター作り体験・親子給食の実施などの食育に関する体験活動を行いました。

また、平成27年度には、「早寝・早起き・朝ごはん」という演題で宇都宮大学准教授大森玲子先生による講演会を実施し、成長期の子どもたちにとっての朝ごはんの大切さについて、たくさんの保護者の方が研修を深めました。

こうした活動は、学校だけでなく保護者はもちろん、地区内の育成会や自治会でも共有され、学校、家庭、地域が一体となった取組になっています。平成27年3月には、このような実践が認められ、「早寝・早起き・朝ごはん運動」の推進により文部科学大臣表彰を受けました。食育に関するアンケート調査からも、本校の児童は朝ご飯の欠食がほとんど無く、睡眠時間も県や全国平均よりも長いという結果が出ています。家庭の協力の下、規則正しい生活習慣が身に付いてきており、今後も継続して、保護者や地域と連携しながら児童の健全育成に努めていきたいと思ひます。

## 地域のもつ教育力を生かした学校づくり

佐野市立多田小学校 山本 道夫

本校は明治6年に創立し、平成17年2月に1市2町の合併により佐野市立多田小学校と改名、現在79名の児童が学んでいます。学区内には、秋山川・東武佐野線・田沼工業団地・樹齢約700年のこぶけやき（県の天然記念物、とちぎ名木百選）等があり、様々な学習で活用されています。

本校では、「子供が輝き、教職員が輝き、保護者や地域が輝く学校の創造」を目指して教育活動を実践し、地域との連携を進めながら信頼される学校づくりを推進しています。特に地域のもつ教育力を生かした学校づくりとして、平成13年から始まった「多田っ子広場子ども教室」や「学校支援ボランティア」「放課後子ども教室」があります。

多田っ子広場は、公民館長や主事・町会長・PTA・育成会・老人会などの様々な団体で実行委員会を組織し、土曜日に「郷土料理耳うどん作り」「ふれあいハイキング」「サッカー教室」などを行っています。学校支援ボランティアの活動は、学年に応じて「じゃがいも栽培」「生き物探し」「田植え・稲刈り」「地層の学習」「茶の湯体験」などを行っています。



郷土料理耳うどん作り

また、1年生が上学年と下校するために待機している時間や保護者会の時間には、主に民生児童委員が組織した放課後子ども教室を開き、「読み聞かせ」「昔の遊び」「学習支援」など行い、児童の安心安全な居場所をつくっています。

平成27年に「多田っ子広場子ども教室」は長年にわたる活動に対して、文部科学大臣より表彰されました。今後も学校と保護者、地域が一体となって児童の健全育成についての理解を深め、強い協力体制を確立していきたいと思ひます。

## 「地域とともにある中学校づくりをめざして」

宇河地区中学校副校長会・教頭会長 星 和人

現在、宇河地区中学校副校長・教頭会は、学校数30校（宇都宮市27校、上三川町3校）、会員数31名である。宇都宮市では平成18年から教頭を「副校長」と称するようになり、本会の名称も「宇河地区副校長・教頭会」となりました。

平成24年度からの学習指導要領の全面実施や社会生活の高度化、情報化の進展など、学校を取り巻く社会情勢が大きく変化する中で、当地区副校長・教頭会の果たす使命も重大であり、社会を担う生徒の育成を目指し、研究実践に取り組んでいます。

本地区の研究は、平成26年度を初年度として、「小学校や地域のつながりを生かした教育課程の工夫」・～教頭職の関わりについて～をテーマに3年間をかけて研究に取り組んできました。今年度は3年目に当たり研究のまとめの年となるため、これまでの研究でできた課題について、その解決に向けた方策を検討しています。

今後は、学校教育の大きな転換が求められ、教育改革が進んでいる現状において、地域に信頼され、地域の誇りとなる、魅力ある開かれた学校づくりのために、強力な推進役として副校長・教頭に寄せられている期待も大きく、学校として取り組まなければならない課題も多い。さらに、地域や子どもの実態を考慮した特色ある学校づくりのための教育課程の運営、さらに学校の取組、地域や保護者への情報公開や説明責任、校内の組織力、教員の参画意識の改革等への関与など副校長・教頭へのかかわりは多岐にわたります。

これらに関し、副校長・教頭としての役割を明確にしながら、職責の究明をし、教育管理職としての諸能力の向上を図っていくことが重要です。

そのためには、次年度からも3年間の見通しを持った研究計画を基に研究を深化・発展させ、課題解決をしていくことが重要となります。

学校・家庭や地域社会が一体となって、子どもたちにしっかりとした学力を身に付けさせ、「生きる力」をはぐくみ、自立した心豊かな人間を育てることを目指し、全員が結束し、組織的・継続的に研鑽を積み、研究を深めていけるよう努力しているところです。

## 那須地区小中学校教頭会の取組

那須地区小中学校教頭会長 福 田 隆

那須地区小中学校教頭会は、大田原市、那須町、那須塩原市の3市町の小学校50名、中学校23名、計73名で組織されています。

本会は、教頭職の立場から、学校管理運営について研究し、その見識を高め義務教育の振興に寄与すると共に会員相互の福祉と親睦を図ることを目的としています。

本年度は、構成1町と2市をそれぞれ2ブロックに分けた合計5ブロックで研究を進めております。研究課題はそれぞれに「組織運営に関する課題」「施設・設備及び事務に関する課題」「副校長・教頭の職務に関する課題」「教職員の専門性に関する課題」「子どもの発達に関する課題」です。これらの研究については、例年10月に全体研修会として研究発表を実施しております。この発表大会では、全体研修会として、栃木県教育委員会事務局那須教育事務所各課長様方より、今日の教育課題に関する御講話を頂いた後、分科会として各研究課題に分かれて研修を深めております。分科会の中で行われるグループ協議は、同じ悩みを抱えた教頭として活発な意見交換・情報交換が図られ、たいへん充実した研修となっており、相互に高めあえる教頭会を実践してきております。

平成26年度より継続してきたこれらの研究のうち、「施設・設備及び事務に関する課題」についての研究主題を「情報機器を有効に活用するための環境づくり」として、また、「副校長・教頭の職務に関する課題」についての研究主題を「小中連携における教頭の果たすべき役割」として、県の研究大会において発表する予定です。御存知のとおり、全国統一研究主題（H26～H28）の最終年度の研究となります。研究の集大成として、実りある研究となるよう全会員一丸となって進めて参りたいと考えています。どうぞ御期待ください。



## 音楽の果たす役割

宇都宮市立岡本小学校 黒田 昌宏

先日、初等教育資料（東洋館出版社）の中で、歌手で教授である谷村新司さんが、次のような言葉を述べておられたのがとても印象的でした。「音楽の素晴らしさをちゃんと伝えていくために、音楽を楽しんでもらえる、音楽のよさに気付いてもらえる場をつくっていくことが、自分の役割の1つです。」と。学校では、まさしくその場が音楽の授業であり、音楽集会等であると思います。

先日の音楽集会で、授業に出ている4年生の発表があり、ピアノ伴奏として一緒に参加させていただきました。リコーダーや鍵盤ハーモニカ、打楽器等、様々な楽器や歌で一人一人が楽しく演奏していました。みんなで一緒に音楽を作る楽しさを味わい、音楽に興味を持ってくれたら嬉しい限りです。

音楽の時間は、子どもたちに音を体全体で感じさせると共に、心の感覚を鋭く磨き、音を十分に楽しむ時間になるよう心がけています。そして、自然と感性が豊かに育ち、気付くと音楽のとりこになっている、そんな子どもに育てることが理想です。音楽の果たす役割は大きく、人の心を豊かにする不思議な力を持っています。そして、音楽によって癒されたり勇気付けられたり、何より感動したりしながら、人生のパートナーとしていつまでも音楽を好きでいてほしいです。

## 幸せ指数

芳賀町立芳賀中学校 小林 利之

今年度の「世界幸福デー（3/20）」に際して、国連が発表した「世界幸福度報告書」によると、日本は53位と順位を下げている。「教師として、教頭として働く自分は幸せか？」と自問自答してみた。当然のことながら、職務上の困難は多々ある。いかなる努力をしようとも克服できないと思われる困難もあり、夜中にもふと目を覚まし、思い耽ることも多々ある。しかし、「幸せか？」の問いに、一瞬の迷いもなく「YES」と答える自分がいる。

迷いながらも青春を謳歌する3人の息子たち。それを母性愛で温かく支える妻。家族の存在は、職務上のどんな悩みも忘れさせてくれる。時には厳しく、しかし基本的に人として尊敬してくれる上司の存在も幸せの大きな理由である。生徒たちのために日夜必死に努力する先生方。表現は不適切かもしれないが、「愛おしい」存在である。そしてもちろんのこと、全ての生徒が宝のように輝いて見える瞬間に、幸せを感じざるを得ない。

また、2度の日本人学校勤務で出会った日本全国で働く仲間たち。遠く日本を離れて共に頑張った仲間たちの存在は、心の支えになっている。

これからも「幸福度世界一の教師」と胸を張って言えるよう、周囲の人たちを大切に限られた人生を歩んでいきたい。

## わかる・楽しい授業の創造 ～ICTを効果的に活用した授業づくり～

足利市立筑波小学校 中村 徳幸

本校では、「全ての子どもにとって、わかる・できるを実感できる楽しい授業を実践したい。」という先生方の思いや願いを実現するために、本年度、全ての教室にパソコンを配置し、既存の大型テレビを電子黒板化することで、ICTを活用した『わかる・楽しい授業』を実践しています。

今までは、小さくて見づらかった教科書や資料集、学習プリント等の文字や図、写真等をテレビ画面に拡大提示することで、学習に対する子どもたちの「興味・関心の高まり」を実感するとともに、子ども自身がテレビ画面に電子ペンで自分の考えを書き込みながら説明する活動を通して、子どもたちの「発表力の向上」も実感しています。さらに、校内無線LANによる動画コンテンツの活用は、授業の導入やまとめの場面における「知識の定着」にも大いに役立っています。

以上のようなICTを活用した授業の実践をとおして、①子どもの学習意欲が高まった ②子どもたちの視線が電子黒板に集中し、表情から一人一人の理解度を把握しやすくなった ③自分の考えを皆の前で堂々と発表できる子どもが増えてきた 等の効果が確認されています。

今後も、「わかる・楽しい授業」の実践に向けて、ICTを効果的に活用した授業づくりの研究を全教職員で進めて行きたいと思っています。

## 編集後記

今年も暑い夏でした。地球温暖化の影響でしょうか。これからは、「猛暑の候」という時候の挨拶が当たり前になりそうです。

ようやく涼しさが訪れましたが会員の皆様には、いかがお過ごしでしょうか。

さて、今回の会報では、定期総会や各部の活動、徳島県で開催された全国大会等について掲載させていただきました。

気温だけでなく、学校教育を取り巻く環境も日々変化する今日この頃ですが、当会報が少しでも会員の皆様の参考になれば幸いです。

末文ですが、ご多用中にもかかわらず原稿をご執筆くださいました皆様に深く感謝申し上げます。（神野）